AG通信 No. 6

AG 通信＜秋山画廊通信＞は画廊空間での美術作品の発表の代わりに，紙上で言語・文章による表現をしていこうという試みから、月一回のペースで発行されます。特別なコンセプト・テーマなどの規定を設けず、美術家が個展・グループ展をするのと同様に、自由な発言の場として活用していただきたいと思います。美術作品ではなく、基本的に投稿によって出来上がる性質のものなので、美術作家以外の方も参加できます。原稿は、毎月１５日までに、画廊宛、FAX(03-3401-9505) 又は PC フロッピー(windows 版)でお送りください。お待ちしております。

「もっとも遠くの人へ」

村岡三郎

第一章

晩夏の陽射しが今日はいつもより明るい。
先を歩いていた少年が、ふと振り返って
「おじさんは何処にいくの」と、聞いてきた、私は少年の顔を見ながら
「別にあてはないんだが、」と答えると、その少年は何を思ったのか「じゃあそこの角を曲がったところのおもちゃやさんに行こうか？」と私を誘った。私は一瞬とまどったが別に行くあてもないので、そのまま少年の後について行った。
「ここだよ」と少年は指差しながら、そのなかに消えた。私もつづいて重いドアを押しながらその中に入った。
　“おもちゃや”にしては思ったより広く、がらんとしていた。ただ四方の壁は大理石のように磨きがかかり、それにそってガラス棚の上に、何かがびっしり並べられている。見上げると天井は高く、湾曲した中央に三段重ねの豪華なシャンデリアが、その光を湾曲した周囲にきらきら映しだしていた。

ふと少年はと見ると左隅の棚で何か探しているようだ。私はとりあえず正面の棚の一つを手にとってみると、それはなんとあのダビンチの二枚スクリュウのような飛行道具だ、しかし作りは意外と素朴だ。そしてその横にはルーブルでみた翼を広げたニケの像、その奥にキリコの輪回しの絵が立て掛けてある。私は追われるように次々目を移していくと、セ

ザンヌの郵便局員、マチスの赤い部屋、ピカソの羊，リヒターの組写真、そしてティンゲリーのニューヨーク賛歌…等等、そのどれもが今まで私が見聞きしたものばかりだ。ただ奇妙なことに、そのサイズが一様にコンパクトだということ。しかし私はそれもあまり気にならなくなり左の隅に目をやると、何故か鳥羽絵の獣人戯画の上にデュシャンの瓶掛けが横に倒れて置かれていた。

すこし疲れたので，丁度部屋の真ん中あたりにぽつんと、置かれていた堅い木の椅子にゆっくり腰を下ろし、そして胸のポケットから煙草を一本取り出し火をつけた。煙がよどみながら大理石の床を這っていく…。改めて見渡すとどうもこの部屋には窓がないらしい、そのとき少年が小さな丸い包みを手にぶらさげながらこちらに歩いて来た。
「おじさん何か気にいったものがあった？」私は少し手を横に振ると
「じゃあ僕のいた、あの棚に行けば？」
私は煙草の火を指でもみ消しながら言われるままにその前に足を運んだ。

少し黄ばんだ紙が一枚ある、よく見るとガリレオの丸い木星の横に三つの衛星が記されたスケッチ。ケプラーの、地球の軌道の二点と太陽とを結んだ反対側の地球軌道の面積の比が、常に同じであることを示した研究ノート。そしてその横に顕微鏡が置いてあった。
私はそっと覗き込むと「いた！いた！」無数の大腸菌が、丸い小さい視野の中で、まるでブラウン運動のように小刻みに動いている、私はこの無目的な小さな動きが好きだ。思わず見入っていると、後ろからこつこつと肩をたたくので振り返ると、小太りの老人が笑いながら立っていた。
「お気に入りのようですな」というと、いきなりそれをわし掴みにして、くるくるっとハトロン紙に包み込み、紐をかけながら私に渡そうとした。呆気にとられながら、あわてて
「あ～今日はお金を持ってないんだ。」と手を振ると、いつのまにか側に来ていた少年が
「おじさんいいんだよ。」言いながら無理に私にその包みを持たせた。

私は少年にうながされて、又改めてもとの棚に目をやった。小さなガラス容器が三つ並んでいる。中には何も入っていない。すると少年が
「一つ目は水素、二つ目はヘリューム、三つ目は炭素の原子が一つずつ入っているんだよ」と教えてくれた。・・・私もそう思うことにした？　そして次のを見ると、四角い陶器の蓋に内臓物の表示が書かれている、目を近づけると「虚数」と記してあった。そしてさらに右隅の棚には・・・・ひからびた仏陀と、今十字架から降ろされたばかりのキリストが、魚の干物のように並んでいた。

私は少し頭がくらくらしてきたので、
「ちょっと外に出ようか」と少年に声をかけた。少年は黙って頷くと、すたすたと出口の

方へ歩き出し。そのとき、先程の老人が足早に寄ってきて
「これ昨日入荷したんだが、よかったら持っていきな」と差し出した。私は何かわからないままそれを無意識に小脇に抱えて外に出た。

道路わきのベンチにいる少年が手をあげている。私は彼の横に座り又煙草の煙をゆっくり吐いた。
「おじさん大丈夫？」といいながら少年が私の顔を覗きこんだ。
「あー大丈夫だ、ところで君の持っているその丸いボールのような物は何だ？」少年は少し間をおいて
「これはおじさんも知っていると思うけれど、六つある＜コーク>のうちの一つだよ。あの店のお爺さんが１０の１４剰倍の大きさにしてくれたんだ」そして今度は声をはずませながら「この中にある１１次元に絡み合った＜ひも＞をなんとか取り出したいんだよ」と言った。・・・私はおもわず首を回し、頭をがんがん平手で叩いた。しばらくすると少年は立ち上がり、「僕はもう帰るよ」といい残して大通りのほうへ走り去っていった。名前を聞くのを忘れたが、これが、私と少年の最初の出会いだった。

注・＜コーク＞宇宙誕生(ビッグバン)から１０$^{-34}$秒後に発生したとされる、陽子を構成する究極の最小素粒子。
・　＜ひも＞「超紐ひも理論」によるとコーク内に閉じ込められた１０$^{-34}$センチの振動する弦のようなもの。

第二章

今朝は少し肌寒いと感じながら仕事場の重いシャッターを開けると、突然目の前に先日の少年と女の子が立っていた。
「やあーおじさん元気だった」と少年はにっこり笑いながら
「ここを探すのに三日もかかったよ」すると女の子が少し体を横に傾け、指一杯ひろげた手をふりながら
「こんにちは」と、はぎれのいい声で私を見た。
私は驚きと同時に、何だか急に嬉しくなって
「まあ入りなさい」といいながら二人を奥の小さな書斎に案内した。
私は冷蔵庫を開けながら
「何か飲むかい」と聞いたら女の子が利発そうな目をぱっちりさせて
「私は今いらない」といった。実はこの女の子は私と少年との会話を、終始黙ってにこにこ

しながら聞いていたが、後で重要な奇才を放つことになる。

少年は机の上を指差しながら
「これ　あの店を出る時爺さんから買ったものだね（実は貰ったもの）、ところでおじさん何だったか調べてみた」
「添え書きがあったので読んでみたんだが、医学、生態学に関する脳と心臓の停止条件とか、そのときの体内分泌の変化とかが記されているだけで、実は本当の中身については何もかかれていないんだ」
私はその添え書きを少年に渡した。少年はそれをじいっと黙読していたが、
「今これを無理に開けないほうがいいね、この下に小さい字で～ときが来れば自然に開～と書いてあるよ、ところでおじさんは今迄に自殺しようと思ったことある」
「そうだね、ないこともないが・・・・しかし、今それを無理にこじ開けるつもりはないよ。それよりこの中身を見透視したいと思って別の方法を色々試みてはみたんだが、もうこれ以上は不可能だよ。　やはり人は自分の目を自分の目で見ることが出来ないように、そしてデュシャンが一（死んでいくのは他人ばかり）ーと言ったようにね」
すると少年が静かな口調で
「僕もそれは解るけれど、折角おじさんしか持っていないそのものが，何時もそこにあるのに。あまり他の人の言葉に惑わされずに、もう少し頑張らなきゃあ駄目だよ」
一瞬言葉に窮したが、しばらくして、私は少年の目をかわすように
「ときどき白昼に消し忘れた街灯のように、明るくなったり、いきなり突然切れた電球のように真っ暗になり、そして今度は急に軽く成ったかと思うと、突如物凄く重くなったり、するんだ」
少年は今度は目を輝かしながら
「おじさん、それだよ、そこにヒントあるかも知れないよ」
「どうして？」
「今重くなったり軽くなったりすると言ったね？きっと、これは見るものではなく、おじさん自身その手で持つものなんだよ、」
「そうかねえ？」
「そうだよ、そしてその時のおじさんの思いを、理性との境界線上で、針が振り切れるまで増幅させるんだ。すると両方が破壊されて一瞬狂気の領域に入るよ、その時がその中身に一番近いところに居る筈だと思うよ」
「・・・・？」
「言っとくけどおじさん、そのとき底無しの不条理に引きずられて、くれぐれも取り違えないようにね。そうでないと、あのひからびた仏陀やキリストのような干物になるよ」
「そうだね。ところで取り違えないためには君はどうすればよいと思う」
「あーそれはね、一つの方法として常に宇宙の空域を、冷徹に、論理的に、他の人の手を

かりながらも探査し、考えつづけることだと思うよ」
「私も同感だ。　　とにかく君の言うように試みてみるよ」

「ところでもう一つふにおちないことがある。あの店の爺さん、これをいったい何処から仕入れたんだろう」
「は・は・は・は・・・」と少年は声高に笑いながら
「おじさん騙されたんだよ気がつかなかった？、おじさんがあの大腸菌見入っているとき、爺さんが、そおっとおじさんの背中から抜き取ったんだよ」
「えっ　」
「おじさん怒ったら駄目だよ、あの爺さんがわざわざ，もの　にして又おじさんに返してくれたんだから」

この二人の不毛な会話を打ち消すかのように、突然窓の外で風が舞い上がり、庭の木がざわめいた。　ふと女の子に目をやると、やはり少年の横でにこにこしながら行儀よく座っていた。　　（次回三章につづく）

Mission from Mr.Nomura.

山本裕子

野村氏からなぜかコテンパンにやっつけてほしいという依頼を受けた。
コテンパンとは不思議な言葉である。しかし音の感じから行けば、パンッとはったりをかました強げなヤツを力尽くで八つ折にする感じだが、どうだろう・・・？？この野村氏の逃げ腰の鰻のような文章では、コテンパンッともいかない気がする。捕まえたと思うとスルリと手から落ち、ここかと思えば不明の泥の中に逃げ込む。意図して言いたいことを奥の細道（使い方が違うだろ！？）に逃げ込ましているのか？？以前に氏のタルコフスキーの「ノスタルジア」に関する文章を読んだときには、確かに面妖ではあったが、けっこうしみじみとしていて・・・今回とは印象が違うような気がするが・・・
鰻ならば、ばっさり捌くというのが良いような気もする。まあ、あまり枕が長くなっても仕方ないので、そろそろ本題とまいりやしょうか。

まず、今回の氏の文章の表題には、どうも「美術が本当に理解されること」への願望が現れているように思えるのだが、それでいて最初の段落の終わりには「理解不可能なもの

AG通信　No. 7

AG 通信＜秋山画廊通信＞は画廊空間での美術作品の発表の代わりに，紙上で言語・文章による表現をしていこうという試みから、月一回のペースで発行されます。特別なコンセプト・テーマなどの規定を設けず、美術家が個展・グループ展をするのと同様に、自由な発言の場として活用していただきたいと思います。美術作品ではなく、基本的に投稿によって出来上がる性質のものなので、美術作家以外の方も参加できます。原稿は、毎月１５日までに、画廊宛、FAX(03-3401-9505) 又は PC フロッピー(windows 版)でお送りください。お待ちしております。

「もっとも遠くの人へ」　（前号からの続き）

村岡三郎

第三章

名古屋での個展が近づいてきたので私は体のだるさを抑えながらプランニングに集中していた。タイトルは「分離した熱」不確定な熱の層を、分離し、引き離すという観念と物質との相克には少なからず興味がそそられるが、ただ二つに分断された空域の距離をどの位に設定するか、そのあいまいな厳密さに迷い込んでしまった。その時ふとかの少年の＜コーク＞から　ひも　を取り出したいと言っていた話を思い出した。私は鉛筆をスケッチブックの上に置くとシャッターを開け外に出た。
いつのまにかこの前の“”おもちゃや”の通りにきていた。その向かいの方を見るとやはり少年と女の子がベンチに座りながら缶ジュースを飲んでいる。
「やー」と近づきながら声をかけると、少年が女の子の顔を見ながら
「今からおじさんのとこへ行こうと思ってたとこだよ、ねー？」女の子は　こくんと頷いた。

「丁度よかった、君に聞きたいと思っていたんだが、例のあの＜コーク＞の　ひも　うまく取り出せた？」
少年は首を傾け両手を広げながら

「それがなかなかうまくいかないんだよ、＜コーク＞は六つあるんだが、そのそれぞれの振動数が違うだけで実は一つのものらしいんだ」
「むつかしいね・・・・ということは“在る”ということはその根源は“振動”ということか？」
「おじさんそれはすこし単純すぎるかも知れないが、僕もそれは正しいと思うよ、」
「しかし君の難問を解くにはその＜コーク＞の発生したその場に行くしかないね？」
「うん　そうなんだが、なにせ光の速さで１５０億年の過去の彼方だからね、しかも僕たちの居るこの場は時空がすでに分離し、時間のベクトルの矢が宇宙の膨張と共に非可逆性の方向に向かってしまっているしね、ちょっと無理みたい」
するとジュースを飲み終えた女の子がその缶を両手でぎゅっと凹ましながら、
「そんなの簡単だよ私は何回もいったよ」
「えっ！？」二人は唖然として女の子の顔を見た。
「おじさん達の思う乗り物が私と違うんだよ。＜仮説の２剰＞という乗り物に乗り換えるんだよ、光速なんてもう古臭いんだから。
私がこの前行った時には、ウッテンとブリジストン大学の＜ひも理論＞研究員の二人がうろうろしていたよ」
「そんな・・・？」　少年は思わず大声をあげた。
女の子は少年の顔をちらっと横目で見ただけで
「そこはね未だ＜コーク＞も発生していない宇宙の始まり＜ビックバン＞と言ったっけ、過去の最果てのところだよ、だから時間も空間も、重力を含む四つの力も混沌としたもっとも単純なところで、当然おじさん達が気にしていた時間のベクトルの矢もないんだよ。
あーそれからもう一つ言っとくけど、そこにある＜トンネル効果＞を逆にくぐり抜けると、この宇宙の外に出ることが出来るんだ。私は未だ行ってないけど、そこは真空エネルギーと「虚数」の世界で他の宇宙がどんどん出来ているところらしいよ。今度三人で一緒に行ってみない？」
呆気にとられて私は少年の顔を見た。　少年も私の顔を見た。
暫くして少年は「・・・仮説の２剰？・・・トンネル効果を逆にね？・・」と真顔でつぶやいた。
そして、急に思い直したかのように
「明日おじさんのところへ又行っていい？今度はいろいろおじさんのことも聞きたいし」
「あーいいよ」と言い残して、私は何ともうつろな気持ちで又来た道を引き返した。　途中コンビニでお茶とアーモンドチョコを買った。

注　＜トンネル効果＞
真空エネルギーの波動現象により
突然引き起こされる極地点（ビックバン）

第四章

昨日の女の子の話が気になって仕事が手につかない。非論理的だが何故か私自身が二重に大きく滑り，ずれ始めていることに気がついた。しかしどうもその兆候はあの少年に初めて会った時から始まり出していたようだ。

約束どおり二人がやってきた。
少年は今日は部屋の中をぐるっと見回しながら
「おじさんは何時頃から“この仕事”をやりだしたの？」
「そおだな１９５０年頃からかな、　まあ二人とも立ってないで座りなさい」
女の子はこの前と同じ椅子に座りながら
「おじさん御土産」と言って手を差し出した。　アーモンドチョコだ！―この子は知ってるんだ―
少年は座り直しながら「その時、何か動機があったの？」
「ないこともないが、今時こんなことを話しても君達にはピンとこないかもしれないが、・・・・まあいいか、　実は私は戦時中海軍少年航空兵だったんだが、今もよく覚えていることは、終戦も間近毎日仲間が一人二人と死んでいく中で、生き残った者同士毎朝兵舎の片隅で昨夜見た自分の夢の話をまるで日課のように話し合うようになった。今から思えば異常としか言い様がないが、しかし例えば化け物に追われている夢でも、夢の中では唯一自分の意思で逃げる自由があるからね、どうも私はそういった後遺症が終戦後も残っていて、とにかく一人で考え、それを自由に話せる自由が無性に欲しかった。その時まだ１７才だったんだが、多分それが今の仕事に走りだした単純な動機と言えば動機だろうね」
「僕達でもそれは何となく解るよ、しかしたいへんだったんだね、ところで今はどうなの？」
「今か、一言でいえば、それが怒りに変わったよ」
「あーそれがおじさんの世代なんだ」
「そうとばっかりは言えないよ、今のこの国の底板を外してごらん戦前となんら変わらんよ、その底にはナルシズム化した“自然性”がべったり腐りかけてへばり付き、この国のアイデンティティーは常にそこから臭気を発散させているんだ。反吐がでるよ。東京千代田区一番町に行ってごらん、一見堀に囲まれた不気味な無人島と思えるぐるりを無数の車が走り回り、奇妙な遠心力が今も働いているから・・・」
「うん、おじさんの言う自然性というのは確かに両刃の剣だよな。ところでおじさんのその持続している怒りと、おじさんの今の仕事（芸術）とはどういう関係があるの？」

「いい質問だ、私の怒りは対社会、対政治だけに向いているのではない、むしろその中に組み込まれている私自身へのものでもある。それは当時我々は被害者であると同時に加害者でもあったんだ。我々の戦後は、混乱とその自己変革への戦いから始まったともいえる、それが私たちの世代なんだよ。私は先ず、いま言った私の中にも巣くうこの国固有のナルシズム的自然性の解体が急務で、そのために私は改めて人間と物質の関係を問い直す必要にせまられた」

「どう、それでおじさんはうまくいったの？」

「それが、そう簡単ではないんだ、確かに当時としては唯物論的立場は強力な武器ではあるが、表現は例えば視るものへの変換作業は時として常に観念と実感をともなう、したがって私の場合はその弁証法的立場よりも、むしろ＜否定の弁証法＞への欲求にかられたんだ。　それからもう一つ、それを他者に見せるという行為がある。もし人の目に触れなければそれは芸術の因子でありつづけるだけで、それを芸術とは呼ばない。芸術という言葉とその意味はすでに他者に依存されたもので社会化されたという行為を含めて人はそれを芸術と呼ぶんだよ、そこをよく勘違いするんだ。しかし最近表現の日常化又過去との決別ということで、解りやすく（漫画ぽく）、楽しく、又癒しとかいうことで町の画廊、美術館等でこのてのものがやたらに氾濫しているようだが、これも、ものすごく勘違いで、世代とか状況とかいう仮舞台での傷の舐め合いにはもううんざりだよ。　他者はそんなに甘くはない、もっと真に貪欲なんだということを知るべきだよ」

「その点おじさんは？」

「言葉はすこし悪いが私は見せることで、たえず喧嘩を売ってるつもりなんだ。この傲慢さは許されると思っている。しかし、とにかく常に暗闇への飛躍だよ」

少年は少し私の気をひくように

「おじさん、いまふとバタイユの言葉を思い出したよ、　～人間はたえず新たな機会、可能性に直面するものである、人間本来のありかたはこのような可能性を保留せず常にその先端まですすんでこれを経験に換えることにある。可能性を延期する態度は欺瞞であり、最大の欺瞞は救済の信仰である～とね」

「同感だが　しかしかなりのエネルギーがいるね」

すると突然女の子が微笑みながら

「おじさん、頑張ろう！」とかわいい声でいった。

私はこの女の子が何故か好きだ。

今日は朝から曇りがちだったが白い雲の間からまぶしい光が庭一杯にひろがりだした。

私は二人を連れて庭に出た、少年は眩しそうに空を見上げながら、

「おじさんのアトリエに二三枚天体の写真が貼ってあったが、いつ頃から興味をもったの？」
「そうだな　中学二年生の頃かな、何がきっかけだったか思い出せないが、当時の着物の反物の芯（厚紙でできた円筒）等を使って悪戦苦闘しながら小さな天体望遠鏡作りに熱中していたんだな、ところが、実はそれで初めて自分の目で月のクレエターを視た時、それは感動というより何故か恐怖が背筋を走ったことを今もありありと覚えているよ。それからかなり少し天文オタクになったのは、それがこうじて未だ君には見せてはいないが、このアトリエの屋根裏の手造りの望楼に口径３０センチのセガグリックの望遠鏡を据え付けているんだよ、ハップルとかスバルとまでは程遠いがね」
「へーおじさん後で見せてよ。　ところでよく宇宙を知るのに何も無理して空を見上げずとも例えばこの目の前にある葉っぱをじっと見ればそこに宇宙があるという人がいるけれど、おじさんどう思う？」
「その穴に落ち込むと居心地がよくてなかなか出られないんだ、なまじ、したり顔の文化人にそのタイプが多いね。禅坊主的納得型というたぐいなんだが、しかしそれは違うんだよ。葉っぱと対峙することで良しとするのではなく、この葉っぱが何故そこにあるのか？を問いつづけることだよ、それが科学的であれ、哲学的であれその先の扉の向こうに１５０億光年の広大な宇宙空域が広がっているんだ。星空は単に美意識の対象ではなく、考える対象なんだ。埴谷雄高が＜宇宙を思考範囲に入れない思想は思想ではない＞と言い切ったがまさにその通りだと思う。自分の背丈の範囲の目線でしか現実を追いつづけられないのは人として不幸だよ」
「不幸？」
「そうだよ＜コンタクト＞という映画の女主人公のせりふに更にこんなのがあるよ～宇宙は私たちには想像も出来ないほどとてつもなく大きい・・・地球人だけじゃ広い宇宙がもったいないわ～と、これは我々以外に知的存在を視差しようとしたものだが、その是非はともかく彼女の言うこのもったいないわという言葉は私にはきわめて魅力的だ」

少年は微笑みながら　大きく頷いた

そろそろ紫色の大気が木の間を縫い始めた、その中を去っていく二人の後ろ姿を見ていると、先ほどのはずんだ会話とは裏腹に、私は又言いようのない寂しさに包み込まれていった。晩夏の夕暮れは早い。

第五章

坂の上で少年と女の子がしゃがみこんで何か話し込んでいる。

「あのおじさんどうしているんだろう？もう半年も顔を見てないね」
「私はこの前大通りでちらっと見かけたけれど、何かものうい顔つきで下向きかげんに歩いていたよ」
「そういえば、以前アトリエの前で別れしなに、突然ぽつんと～変身したいんだ～というようなことを言ってたよな、きっと自分をもっと解き放ちたいんだよ　それにあの机の包みおじさんどうしたかな？」

女の子はじっと坂の下の一点を見ながら
「私には初めて会ったときから解っていたわ・・・私はそれを手伝って上げようと思う」
ときっぱり言った。

私は遠くから二人を眺めていたが、ゆっくり二人に近づいた。
少年が後ろを振り向くと「あっ！おじさん」と驚いて私を見た。
「やあー」と言いながら私は二人の居る坂の上に立った。
すると、突然女の子が　ぽーんと私の背中を突いた。
私は思わずよろけて、転がるように坂下に向かって走り出した。もう止めようがない倒れないためには走るしかない、どんどん加速度がつく・・・・この坂は登(のぼ)りがない、ただひたすら降(くだ)りだけである。

女の子は膝を抱えじーっと目を伏せ、つぶやくかのように「・・・おじさんは走っている・・・どんどん走ってる・・走ってる・・・・・・あっー、おじさんが泣いてる、目に涙を一杯溜めながら一生懸命走ってる。　　とうとうおじさんは変身したんだ。　おじさんの影が切れ切れになり出した・・・もう消失点が近い」

その時隣にいた少年がすっくと立ち上がり、ポケットから赤い小さな包み紙を取り出すと、その中の白い粉を一気にあふった。少年は少し表情をゆがめただけでその場に倒れ込んだ。
女の子はその少年の横顔を静かに見ていたが、突如身を翻すと、あっという間にその姿がかき消されるように消えた。
きっと彼女のあの得意の乗り物で、バニシングポイント（消失点）の向こうに先回りしたに違いない・・・・・・。　　（・・・・・と言ってこれを書いてる私は一体だれなんだ。
多分、おとぎ話ともつかない、この<もっとも遠くの人へ>の宛先人であるのかも知れない。

をわり